

取り立て助詞「ばかりの文法的意味 - 中国語の範囲副詞との対照研究のために -

日本学術振興会外国人特別研究員 張 建華

0. はじめに

日本語の取り立て助詞を中国語に翻訳する場合、常に複数の中国語が対応する。特に日本語を中国語に機械翻訳する際、そのどれを選ぶか、どのような構文や表現を用いるかが、難しい問題である。日本語・中国語間の機械翻訳のための研究が急がれるが、そのためには詳細な対照研究が不可欠である。本稿ではまず、日本語の取り立て助詞のうち「ばかり」についてその文法的意味を明らかにし、これからの中国語の範囲副詞「净」などとの対照研究のための基礎を確立したいと考える。

1. 先行研究と問題点

「ばかり」は本来「計測」の意味を表す「計る」の名詞形「はかり」が形式化したものであると言われており、「限定」の意味のほか、概数、程度、原因などの用法がある。本論では、主として「限定」の意味を表す取り立て助詞「ばかり」を扱うことにする。

1) 冷蔵庫の中には卵ばかり入っている。

このような「ばかり」を用いた文については、森田良行(1972)、沼田善子(1986.1992)、寺村秀夫(1991)などにおいて、「限定の用法」とされている。このような「限定」の意味を表わす「ばかり」については、その意味の近似から、よく「だけ」と比較して研究されてきた。取り立て助詞の代表的な研究である沼田善子(1986)は、「ばかり」は基本的に「だけ」と同様に、「主張として自者について肯定、含みとして他者について否定」であると述べ、さらに、沼田(1992)では、森田良行(1980)と菊地康人(1983)によって指摘された限定の対象の複数性の問題を踏まえて、視点の角度から「ばかり」と「だけ」の両者の間の意味の違いを次のように説明している。「「ばかり」は複数の自者に対し、その中のそれぞれのものについて注目する個別的視点をとり、その結果として最終的に、その中に他者が存在しないことを断定する。一方、「だけ」はこうした視点をとらず、自者も必ずしも複数でなくてよい。単に自者と他者の中、他者を排除して、自者に限定する。(1992.p40)」

一方寺村秀夫(1991)は「ばかり」の意味については、「 (X) バカリ P」は、X 以外のものを明示的に排除する点で「だけ」「しか」と共通するが、その中心的な意味の一つとして、<すべて>または<いつも>というニュアンスを含んでいる点が異なる。したがって、単なる<排除>の意味の文脈では、バカリはダケと入れ替えできるが、複数のものについて<すべて>の意味を含ませたいとき、あるいは単複にかかわらず<いつも>という含みをもたせたいときは、ダケは不適切になる。(1991.pp177~178)」と述べている。

以上見た通り、「ばかり」の文法的意味特徴については、沼田も寺村も基本的に同じ見解である。「だけ」との違いについて沼田は「視点」という観点を導入しているけれども、いずれにせよ両者とも「ばかり」か「だけ」と異なる点として、「複数性」や「反復性」を念頭においた「すべて」或いは「いつも」の意味を伴う点に注目したものであった。しかし、実際に用例を調べてみると、このほかに「四方は海ばかり」のような複数性とは言えないものや、「見てばかりいるのはつまらないから……」のような反復性というよりは持続性というべきもの、さらに、「痛々しいばかり」や「つのるばかり」など「すべて」や「いつも」では説明しにくい用例もあることがわかってきた。

2. 「ばかり」の基本的意味特徴

先行研究の問題点を踏まえて、「ばかり」の基本的意味特徴について筆者は以下のように考える。

「ばかり」も「だけ」と同じく、「限定」という意味では、全体から部分を限定的に取り立てるのが、その基本的機能ではある(張 1996 参照)。しかし、その場合、取り立て対象を「ある空間的・時間的・抽象的な範囲の中を、同質のものが満たし、それ以外のものは存在させない」といった意味を伴って取り立てるのが、「ばかり」のもつ「限定」という意味の基本的特徴だと考える。具体的に実例を考察すると、次のような三つの場合がある。

(1)同じ或いは同類の具体的事物が空間や何らかの意味的な範囲を等質的に満たす場合、例えば、「本棚の上には英語の本ばかり並んでいる」の例で言えば、「本棚」という空間的な範囲の中を英語の本が満たして、ほかの言語の本 - - 例えば中国語や日本語の本など - - が入っていないということである。

(2)同じ行為動作が反復し、或いは連続的、断続的に持続して、ある時間的範囲を満たす場合、例えば、「弟は勉強せずに、遊んでばかりいる」と言えば、ある時間的範囲が、動作の主体によって「遊ぶ」という動作が頻繁に繰り返されたり、あるいは連続的に続けられたりして、一方的に満たされ、それ以外の動作が行われていないということである。

(3)抽象的な性質状態や感情の場合は、それが意識の範囲を一方的に満たすことにより、その性質状態や感情が一方的に深化あるいは強化されるという結果になると考えられる。例えば、「不安はつるばかりだ」とか「懸命に苦慮する姿は痛々しいばかりだった」などの場合である。

また、「だけ」と同じく、「ばかり」は本来は「評価性」に関しては中立であるが、特に、(3)の場合には、「一方的に満たし、それ以外は(期待されるものであっても)存在させない」という点で、時に「期待はずれ」のニュアンスを伴うことがある。

2. 1. 具体的事物による等質性

まず、「名詞+ばかり」を持つ「ばかり」文において、同じ或いは同類の具体的な事物が空間や何らかの意味的な範囲を等質的に満たすという特徴がとくに顕著である。

2. 1. 1 空間的範囲を等質的に満たす場合

ある限られた空間的範囲の中を、「ばかり」の取り立て対象が等質的に満たして、その他の同類のものは存在しないという場合である。この場合「場所を示す名詞(句)+は+名詞+ばかり(だ)」の形が多いが、後に示すように「場所を示す名詞(句)+に+名詞+ばかり+動詞」の形をとることもある。

(2)もちろん、港にはほかにこんな船はない。とれも帆柱はもちろん、煙突もなく、複雑な形のアンテナを持った軽合金製の船ばかりだ。(悪魔のいる天国)

(3)ここは絶海の孤島。指をどこへ向けても、四方は海ばかり。陸はおるか、ほかに島かげひとつ見えない。(小さな社会)

(4)「この星は犬ばかりの星らしい」(悪魔のいる天国)

(5)日が暮れかけると山は風の音ばかりだった。(晩年)

(2)の例を説明すると、「港」という空間的範囲の中を「帆柱はもちろん、煙突もなく、複雑な形のアンテナを持った軽合金製の船」が等質的に満たし、その他の種類の船は存在しないということである。それと同様に(3)の「四方は海ばかり」の文も、「四方」という空間的範囲は「海」によって占められ、「海」以外のものは何もない。その他の例も同じ意味で類推できる。また、述語動詞のある場合、「ばかり」文の中の述語は存在や結果的な状態を表すものと考えられる。例えば、

(6)「でもおかしいよね。三畳の部屋に道具ばかり並んじゃっててサ。そのスミッコで人間かネズミみたいに暮してんのに」(シナリオ『若者の旗』)

(6)の中の「並ぶ」という動詞は動作ではなく、動作の結果の存続を表している。そこで、ここでも「ばかり」が上と同じ意味を表し、つまり、「三畳の部屋」という空間的範囲を「道具」が満たして、それ以外のものは存在しないということを表していると言える。前に挙

げた例(1)も同様のことが言える。

「ばかり」の「だけ」と異なる重要な特徴として、「ばかり」のつく名詞は複数のものであることが挙げられることがある。しかし、以上の用例から見ると、「船、犬」のような複数のものでとらえられるものもあるし、「海、風の音」などのような複数のものでとらえられないものも少なくないのである。

2. 1. 2 主題の指定する範囲を等質的に満たす場合

主題によって指し示される意味的な範囲の中を、「ばかり」の取り立て対象が等質的に満たして、その他のものは存在しないという場合がある。一般に「～は+名詞+ばかりだ」の形をとる。次の(7)の例でいえば、「盗まれているもの」という範囲が、「運びやすい、換金しやすい」という同じ特徴をもつ品物によって満たされ、そのほかのものは存在しないということである。また、以下の(10)の文も、「先輩や同級生」という人の集まりの範囲の中を、「優しくていい」という同じ性質を持つ人が満たし、それ以外は存在しないということを表す。他の例も同様である。

また、この場合は「ばかり」が「すべて」「いずれも」「全部」「みな」のような副詞と共に起ることが多いことや、「ばかり」のつく名詞の前に弁別的な特徴を規定する連体修飾成分が来ることが多いことが特徴として挙げられる。

(7)盗まれている品物は、帽子、手袋、編み物、クツ下、ネクタイなど、衣類やハンドバック、おもちゃ、香水など、運びやすい、換金しやすい品物ばかり。(KWIC)

(8)「中国書画家名作展」の作品は、植村和堂先生が書を始めてから今日まで収集なされましたすばらしい名作ばかりであります。(パンフレット)

(9)飛行機は、東に向かって飛ぶものばかりだった。(卵とベーコンの朝食)

(10)先輩や同級生は優しくていい人ばかりで、(パンフレット)

2. 1. 3 動作の対象、その他の範囲を等質的に満たす場合

「ばかり」が「名詞+ばかり(+格助詞)+動詞」の形をとる場合は、動作の主体によって反復的、あるいは連続的に行われる動作の及ぶ対象という意味的な範囲を、「ばかり」のつく名詞が表している事物が等質的に満たしていることを表す。例えば、

(11)この三日間パンばかり食べている。

の文でいえば、「ばかり」は一日三回「食べる」という反復的な動作の対象が三日間とも「パン」で占められているということを表す。以下の例も同じである。

(12)「何もねえ。草や山蛭ばかり食べてきたんだ」(野火)

(13)父は、君たちも御承知のとおり、××汽船の調査室に勤めていて、書斎と調査旅行にばかり時間を費している人であったが、(呉雅琴 1987)

(14)知り人は鶴川一人であった。どうしても鶴川とばかり話すようになる。(金閣寺)

また、動作の対象のほかに、動作の行われる様態、場所、起点などが、「ばかり」の取り立て対象によって、等質的に満たされている場合もある。例えば、次の(15)(16)が示すように、主体によって繰り返されている「見る」という動作がいつも「横」という方向から行われ、その他の方向からは行われられないということや、何度も行われる「歩く」という動作の場所が、いつも「同じ通りや横町」で占められているということを表す。

(15)「いつも横からばかり見ている地球儀を、底の方の南極から見てほしい」と。(南極取材記)

(16)やはり自分の泊っている宿の近いところに馴染が出て、つい同じ通りや横町ばかり、何度も歩くようになる。(庭の山の木)

(17)このところ優勝校は九州地方からばかり出ている。(寺村秀夫(1991)から)

(18)柳堂はある時、ふと、藤蔓が常に左から右へ同じ方向にばかり巻いていることを発見した。(寺村秀夫(1991)から)

2.2. 動詞行為の反復・持続

これまで見たとおり「ばかり」が名詞につく場合、同じ或いは同類の具体的事物が、空間的範囲など、何らかの範囲を等質的に満たし、それ以外のものは存在しないということを表すのが一般的であった。動詞につく場合も、上述の「ばかり」の基本的特徴は変わらないが、この場合、ある時間的範囲が、主体によって頻繁に繰り返されたり、連続的に続けられたりする動作で一方的に満たされているということを表す。この特徴は「動詞テ形+ばかり+いる」を持つ「ばかり」文において、最も顕著に現れている。例えば、

(19) 僕は煙草ものまずにその出>ちにち寝てばかりいた。(晩年)

この文では「ばかり」は、動作の主体「僕」による「寝る」という動作が、連続的、あるいは断続的に続いて、「その日」という時間的範囲を満たしているということを表す。また、一般に「動詞テ形+ばかり+いる」を持つ「ばかり」文によって表される動作行為は、反復性・持続性を伴うのが普通である。「ばかり」のつく動詞が「出かける、来る、逃げる」のような瞬間動詞(金田一春彦 1976)である場合は、その動詞は反復性を伴うようになる。「見る、働く、泣く」のような継続動詞(金田一春彦 1976)である場合は持続性を伴うことが多いが、場合によっては、文脈により、その動詞に反復性を与えられることもある。いずれも、時間を表す副詞「いつも」「常に」などと共に用いられることが多い。

2.2.1 「ばかり」文が動作の反復性を伴う場合

先に述べたように、「動詞テ形+ばかり+いる」の形の「ばかり」文において、動作の反復性の意味を伴うのは、主として「ばかり」が瞬間動詞につく場合である。次の(20)は、動作の主体「私たち」が、ある期間「出かける」という動作を一方的に頻繁に行ない、それに対して「家にいる」ことはほとんどないということを表す。

しかし、継続動詞に「ばかり」がついて反復性を表す場合もある。例えば、(23)と(24)の「たたいてばかりいたって」とか「殴られてばかりいる」などのような場合、「たたく」「殴られる」が一回性の動作ではなく、「トントンたたく」「バシバシ殴られる」のように継続性のある動作であり、「ばかり」がつくことによってそれが頻繁に反復されるというふうに見ることができる。

(20) 私たちは東京の家に帰ると、その翌日から、毎日、活動写真を見たり、演奏会に行ったり、また格別の目的もなくとも、街のなかへ出かけた。「帰ってきたと思うと、またすぐに出かけてばかりいるのね」と母はいった。(羊の歌)

(21) 「いつだって俺から逃げてばかりいるおまえに」(東京ラブストーリー)

(22) さとみ「こんな風に男の人の部屋に来てばかりいるのって」(東京ラブストーリー)

(23) ある夜、傍に寝ていた母が私の蒲団の動くのを不審がって、なにをしているのか、と私に尋ねた。私はひどく当惑して、腰が痛いからあんまをやっているのだ、と返事した。母は、そんなら揉んだらいい、たたいてばかりいたって、(晩年)

(24) 私と同じ町から来ている一人の生徒が、ある日、私を校庭の砂山の陰に呼んで、君の態度はじっさい生意気そうに見える、あんなに殴られてばかりいると落第するにちがいない、と忠告してくれた。(晩年)

以上の例はすべて「動詞テ形+ばかり+いる」をもつ「ばかり」文であるが、それと同様の意味を表すものとして、「動作性名詞+ばかり+している」の形もあり、それについて、二三例を挙げておく。

(25) 「あの娘さんはどうしたの。」

駒子はちらっと島村を見て、

「お墓参りばかりしてるわ。スキイ場の裾にほら、蕎麦の畑があるでしょう、白い花の咲いてる。その左に墓が見えるじゃないの?」(雪国)

- (26)「君は、僕の時間にはあくびばかりしている。一時間に百回あくびする」教授には、そのあくびの多すぎる回数を事実かぞえてみたような気がしているらしかった。(晩年)

2.2.2 「ばかり」文が動作の持続性を伴う場合

しかし、「ばかり」が継続動詞につく場合、その動詞の表す動作が連続的または断続的な持続性を伴うことが多い。すなわち連続的或いは断続的に続けられる動作行為が、ある時間的範囲を一方的に満たしていることを表す。(27)では、「見る」という動作が、その期間中、連続的に続いていて、そのほかの動作は行われないうことを表す。(29)の例も、「働く」という動作が続いていて、その時間的範囲を満たしていることを表すが、この場合の動作の持続の仕方は断続的である。

- (27)ほら、近所の子供達が雪だるまを作り始めましたよ。わたしたちも外へ出てみませんか。見てばかりいるのはつまらないから……。(初級日本語)
- (28)「こら。なまけるな。おまえは食べてばかりいて、ちっとも運んでこない。さあ、地上へ行って、人間をぞろぞろ連れてこい」(悪魔のいる天国)
- (29)それにしろ、それは如何にも静かであった。忙しく忙しく働いてばかりいた蜂が全く動くことがなくなったのだから静かである。(城の崎にて)
- (30)尚子「今頃レポートの提出?女の子と遊んでばかりいるからね」(東京ラブストーリー)
- (31)じゃどうすればいいんです。偽善者ぶって、毎日お仏壇にお線香を上げて、泣いてばかりいれればいいんです。(忘却の河)
- (32)やはり小説というものは、頭で考えてばかりいたって判るものではない。書いてみなければ。(晩年)

「ばかり」が動作性名詞につく場合、つまり「動作性名詞+ばかり+している」の形をとる場合も、同様に動作主体によって一方的に、連続的或いは断続的に続けられる行為動作がある時間的範囲を満たしていることを表すことがある。例えば、次の(33)は、「昼間」という時間的範囲が、動作主体の「仕事する」という行為動作によって一方的に占められているということを表しており、上の動詞の場合と同様なことが言える。

- (33)「俺は撮影隊長のウエノが大好きだよ。あの人は昼間は仕事ばかりしているが、夜になるとウイスキーを飲む。俺もそれを飲ませてもらい、実に愉快だった。(サヘルに暮らす)

2.2.3 「ばかり」が名詞につく場合

「ばかり」が名詞につく場合も、「動詞テ形+ばかり+いる」を持つ「ばかり」文と同様なことを表すことがある。例えば、

- (34)うちの子はテレビばかり見て、勉強しない。

という文は、ある期間において、動作主体の「うちの子」が「テレビを見る」ということを一方的に繰り返したり、連続的に続けたりするのに対して、「勉強をする」ことはしないということを表す。この場合、「ばかり」が名詞「テレビ」の後に接続しているが、文脈から見れば、「ばかり」は「テレビ」を取り立てるのではなく、「テレビを見る」という述語全体を取り立てていると考える方が自然だろう。「ばかり」のこのような統語的機能は、特殊な例外を除くと「だけ」にはあまり見られない特徴である。ただし、2.1.1に見たように、「ばかり」が直前にある名詞を取り立ての対象とする場合もあるので、どのような条件で、何を取り立てるのかについて明らかにする必要があると思われるが、一応ここでは、傾向として次の二点をあげておく。

A.「ばかり」のつく名詞と述語動詞との結びつきが非常に密接で、全体がひとまとまりのようなものであったり、慣用的な表現であったりする場合、「ばかり」が名詞についても、

その名詞を含む述語全体が「ばかり」の取り立て対象となる傾向が見られる。

(35) 安田「鉄平君は、今年こそ阪神特殊鋼も高炉を建てるんだと言って、張りきっていましたよ」

大介「あれはいつまでも夢ばかり追って困ったもんです」(華麗たる一族)

(36) (筆者注：姑は)お前にも苦勞ばかりかけたと言って涙を流した。(忘却の河)

(37) 田中「ええ、しかし、美馬さんなどと違って、私共のような私大出のノン・キャリアでは、これという行先の当てもありませんし……それに、子供達は大学へ入る年頃ですので、すこしでもましなところをと、気ばかり焦っていますよ」(華麗なる一族)

(38) 毎日雨ばかり降っている。(初級日本語)

(35)～(36)は慣用的な表現の中に「ばかり」が入っているものであり、(37)と(38)の「気ばかり焦っている」と「雨ばかり降っている」は、名詞と述語の関係が非常に緊密な例である。この場合、「焦る」といえば、「気が焦る」ことであって、「雨」といえば「雨が降る」ということになるようなものである。

B. 文脈によって、「ばかり」の取り立て対象が、述語全体であることが決められる場合もある。

(39) 漫画の本ばかり読んで、勉強しようとしな。 (日本語教育事典)

(40) 名人も名人でないも、あんた。昔から、学校の勉強はせん、商売は嫌い、子守もせん。なにもせんで、ひとりで海へばかり行きよって、それでうまくならなんだらどうかしてますわ」父親は皮肉に言った。(断崖)

(39)について言えば、この文脈では「ばかり」は「勉強しようとしな」ということに対して、「漫画の本を読む」ということを取り立てていると考えられるが、もし仮に「漫画の本ばかり読んで、学校の本は読もうともしない」というような文になれば、「ばかり」は「漫画の本」だけを取り立てることになる。つまり文脈によって、この文では「漫画の本を読む」という述語全体が「ばかり」の取り立て対象になると考えられるのである。他の例も同様である。

2.3 性質・状態の一方向的深化・強化

名詞に「ばかり」がつく場合は、同じ或いは同類の具体的事物が空間や何らかの意味的範囲を等質的に満たすという場合が多かった。動詞の場合、つまり、「動詞テ形+ばかり+いる」の形を取る場合も、名詞の場合と基本的には同じである。ただし、この場合は、時間的範囲の中で動作が頻繁に繰り返されたり、それが連続的、或いは断続的に続けられる動作によって、一方向的に満たされるのが特徴である。次に見る「動詞ル形+ばかりだ」を持つ「ばかり」文は、基本的な特徴において以上とは変わらないが、この場合、抽象的な性質・状態或いは感情が、意識の範囲を一方向的に満たすことにより、その性質・状態或いは感情が一方向的に深化・強化される結果になるという点が前面に出されていると思われる場合が多いのである。また、この場合は、より望ましいものが全然ないという意味で、ときには「期待はずれ」のニュアンスを伴うことが多い。

2.3.1 感情や情動を表す動詞の場合

「ばかり」が感情や情動を表す動詞につく場合、ある種の感情が、話し手の意識という抽象的な範囲を満たすことにより、その感情が一方向的に強化されるという結果になる。例えば、次に挙げた例で言えば、「ただ感心するばかりである」は、「感心する」という感情が、話し手の意識を一方向的に満たすことにより、その感情が強く強調されるという結果になる。

(41) 盲人に特有の鋭い感覚で、ゴムを引き伸ばしたときの温度の変化を、唇で感じとったのが、彼の一連の研究のきっかけであるというのだから、ただ感心するばかりで

ある。(高分子物語)

- (42)この日共産党の代表との交通キャンペーンについての話し合いでしたが、話し合であるのに、相手の話を中断し、皮肉をいい、そのヒステリックな態度にただあきれ**るばかり**でした。(KWIC)

2.3.2 量的、程度的な変化の意味を伴う動詞の場合

「ばかり」が「増える、減る、広がる、つる」などの量的、程度的な変化の意味を伴う動詞についたり、或いは動詞に変化の意味を付加する「～ていく/くる」のような補助動詞に後接したり、または、程度や感覚を表す形容詞の連用形に変化を表す動詞「なる」が伴う形についたりする場合、ある事態の抽象的な状態が一方的に発展していくことにより、その状態が深化、強化されるという結果になるということを表す。例えば、次の(69)は、登場人物の心理的な状態が、一方的に「不安がつる」方へ進んで、進展していくということを表す。(74)は、生活の状況がよくならずに、「苦しくなる」方へ一方的に深化していくことを表す。

このような「ばかり」文は、程度の増加を表す副詞「ますます」「とんとん」「一層」などと共起することが多い。

- (43)警察に一応の届けはしたものの、啓造も夏枝も不安は**つるばかり**であった。(氷点)
(44)土地と違ってカネの価値は**減るばかり**、(KWIC)
(45)火は燃えさかってくる**ばかり**だが、高さから大きい星空の下に見下ろすと、おもちゃの火事のように静かだった。(雪国)
(46)仕事が再開できなければ、生活は**苦しくなるばかり**です。(感傷旅行)
(47)彼は薬を口にあけ、コップの水で一息に飲んだ。しかし、おさまるはずの発作は**ますますひどくなるばかり**。(悪魔のいる天国)

2.3.3 事態の様相の強調の場合

「動詞テ形+いる+ばかりだ」を持つ「ばかり」文は、その文が表す事態の様相という抽象的範囲をある一つの状態が一方的に満たしていることを表して、その状態にある様相がよく強調されるということになる。次にその例を挙げておこう。

- (48)多襄丸は正体なく苦しんでいる**ばかり**。(羅生門)
(49)男はなかなか帰らなかった。(中略)私は彼の消えたあたりまで行って見た。木々がしんと静まり返っている**ばかり**であった。(野火)
(50)私は目を凝らして球形の懸垂物を探していた。無駄であった。熱帯の狂わしく繁った緑が、どぎつく陽を照り返している**ばかり**であった。(野火)

このほか、「ばかり」が形容詞につく場合も、事物の様子という抽象的な範囲を、ある状態が一方的に満たすということを表す。この場合、その様子が強められるという結果になる。

- (51)この一局を失うと、坂田本因坊は名人挑戦者から見放されるかもしれない。秒ヨミに追われながら、懸命に苦慮する姿は痛々しい**ばかり**だった。(KWIC)
(52)父と母とは、翌々日の夜になって帰ってきた。体じゅうにニワトリの入った籠をくりつけた恰好は、すさまじい**ばかり**だった。(海辺の光景)
(53)広い平原には“死の夜”が来ている。朝眺めたらさぞ美しい眺めであろうと思われ**る**が、いまはただ暗い**ばかり**である。(KWIC)

2.3.4 「動詞ル形+ばかりだ」の場合

「動詞ル形+ばかりだ」を持つ文について考察すると、「ばかり」文によって表される事態が、その他の出来事や事態とは相反する展開の中で関連づけられることが多いということに気付く。分かりやすく言えば、「ばかり」文の表している事態が、話し手或いは登場人物

の期待を裏切る、好ましくないものとして評価されることが多いということである。

例えば、次に挙げる(85)では、「ばかり」文が表している「意識は一層尖鋭なかたちをとるようになるばかり」という事態は「彼の自分の意識を消し去ろう」という登場人物の期待に対して、それをはずれた方向で起こった好ましくない事態である。「ばかり」は本来は「評価性」に関しては中立であるが、「ばかり」は「ある範囲を一方向的に満たし、それ以外は存在させない」というのが基本的な特徴であるため、ときには、「期待されるものでも存在させない」ということから、この「期待はずれ」というニュアンスを伴うようになったのであろう。

このような「ばかり」文には、構文の特徴として、「しかし」「か」「ものの」「のに」「ても」などのような、逆接の意味をもつ接続詞や接続助詞が多用される。

(54)彼はまるで自分の鉢を苛めるようにして働き、何かを忘れ去るために意識そのものを消し去ろうとしていたが、肉体が壊れるにつれて意識は鋭角に研ぎ澄まされて、一層尖鋭なかたちをとるようになるばかりのようだった。(北帰行)

(55)「つまらないわ。前はなんでもすぐ纏まったけれど、だんだん個人主義になって銘々がばらばらなの。ここもずいぶん変わったわ。気性の合わない人が増えるばかりなの。菊勇ねえさんがいなくなると、私は寂しいんです。なんでもあの人を中心だったから。(雪国)

(56)「わからねえことはまだまだあるだ、勇一ちゃん、おめえどう思う、戦争はどこでも勝ってるというのにさ、戦争はひろがるばかりだ」(花)

(57)リカ、電話をかけている - - が、呼出し音が続くばかり。(東京ラブストーリー)

(58)「干潮で浅瀬のときは棧が下から見えてきますよ。真珠貝の養殖をやりよるんですワ」「真珠？」信太郎は無意識に問いかえしながら、足もとの海を覗きこんだ。しかし、そこには黒い重そうな水が、すこしずつふくれ上って見えるばかりだった。(海辺の光景)

2.4 「引用節+とばかり」の場合

次にやや特殊なケースとして、引用節に「ばかり」のついた「(引用を表す)と+ばかり+思っていた/信じていた」を持つ「ばかり」文について考える。これは、主体のある現実に対する認識という抽象的範囲を、ある思い込みが満たしていることを表すものと考えられる。この場合、その思い込みは現実と食い違っているのが普通である。統語的な形式としては、「名詞+ばかり」(3.4.1)の特別の場合と考えられないこともないが、この思い込みという点で意味的には異なっている。

(59)一時間程休んでから、男が私を別の温泉宿へ案内してくれた。それまでは私も藝人たちと同じ旅館に泊ることとばかり思っていたのだった。(伊豆の踊子)

(60)「私はあなたが長岡温泉の人だとばかり思っていましたよ。」(伊豆の踊子)

(61)ひる過ぎ、文子とばかり思って、菊治が玄關に出てゆくと、栗本ちか子だった。(千羽鶴)

(62)お父さんは子供の頃、人間というものは正直に働きさえすれば、幸福は一人手で来るものだとばかり信じていた。(国境の夜)

3.まとめと今後の課題

以上をまとめると、「ばかり」の表している「限定」は、「だけ」と比べて、取り立て対象を「ある空間的・時間的・抽象的な範囲の中を一方向的に満たし、その他の同類のものは存在させない」という意味を伴って取り立てるという点が特徴である。具体的には次の三つの場合がある。

(1)同じ或いは同類の具体的事物が空間や何らかの意味的な範囲を等質的に満たす場合。これは名詞に「ばかり」がつくとき、最も顕著に現れる。

(2)同じ動作行為が反復し、或いは連続的、断続的に持続して、ある時間的範囲を満たす場合。これは、「動詞テ形+ばかり+いる」を持つ「ばかり」文において、典型的に表される。

(3)「ばかり」文が抽象的な性質・状態や感情の一方的深化・強化を表す場合がある。この場合は、その性質・状態や感情が、意識の範囲を満たすことにより、一方的に深化し、或いは強化されるという点が前面に出されるという特徴がある。このような場合、動詞ル形に「ばかり」がつく用例が多く見られる。

以上、「ばかり」の文法的意味について、構文のパターンと結び付けて分析した。これは中国語の範囲副詞との対照研究のために役に立つと思われる。例えば、「ばかり」は「場所名詞+は+ばかり(だ)」を持つ文に現れる場合、中国語ではたいてい範囲副詞の「净・全・都」と対応するということがわかる。

四方は海ばかり 四周净/全/都是海。

また、「ばかり」は「動詞テ形+ばかり+いる」のような形で現れる場合、中国語の範囲副詞の「光・老・急」に対応することが多いと言える。

負けてばかりいる 光/老/急是輸。

本稿は時間の制限で、日中対照研究の問題に触れる余裕はなかったが、今後「ばかり」の研究結果を踏まえた上で、「ばかり」が以上のような中国語の範囲副詞と、文法的、意味的にどのような対応関係にあるかについて、さらに詳細に考察し、明らかにしたいと思う。将来的には取り立て助詞全般とそれに対応する中国語の範囲副詞との対照研究にも視野を広げ、日本語・中国語間の機械翻訳のための基礎研究として拡充を図りたい。

付記 この論文は東京外国語大学地域文化研究科に提出した博士論文の中の「ばかり」に関係ある部分をもとに修正してまとめたものである。

謝辞

博士論文の「ばかり」の部分を執筆する際、東京外国語大学の三谷恭之教授から非常にご丁寧なご指導をいただき、須田義治氏や東京外国語大学の日本語学科大学院生からも貴重なアドバイスをいただいた。また、本稿を成すにあたり、国立国語研究所員中野洋氏から助言をいただいた。共に厚く御礼を申しあげる。

参考文献

- 奥田靖雄(1984)『ことはの研究・序説』むぎ書房
久野章(1983)『新日本文法研究』大修館書店
国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞 - 用法と実例 - 』秀英出版
小松光三(1994)「副情報詞(副助詞)の意味機能と体系」『法文学部論集文学部編』27,愛媛大学法文学部
近藤泰弘(1983)「副助詞の体系 - 現代日本語 - 」『日本女子大学紀要』32
佐久間鼎(1940)『現代日本語法の研究』くろしお出版 1983 復刊
杉本和之(1992)「『ばかり』と『たけ』」『中京国文学』11,中京大学国文学会
高橋太郎(1983)「いわゆる副助詞の記述のしかたについて」『日本語学習と研究』1983/1 ~ 1983/2, 对外経済貿易大学(中華人民共和国)
寺村秀夫(1981)「ムードの形式と意味(3) - 取り立て助詞について - 」『文芸言語研究言語篇』6,筑波大学
.....(1991)『日本語のシンタクスと意味・』くろしお出版
.....(1993)『寺村秀夫論文集』くろしお出版
沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
.....(1992)「とりたて詞と視点」『日本語学』1992/8,明治書院
樋口文彦(1989)「評価的な文」『ことばの科学』むぎ書房

益岡隆志(1990)「取り立ての焦点」『日本語学』1990/5,明治書院
.....(1991)『モダリティの文法』くろしお出版

出典

秋田雨雀『国境の夜』 / 石田保昭『インドで暮らす』 / 大岡昇平『野火』 / 小川了『サヘルに暮らす』 / 加藤周一『羊の歌』 / 川端康成『伊豆の踊子』『千羽鶴』『雪国』 / 呉雅琴『日本語・中国語対応表現用例集 - 日本語の取り立て助詞に対応する中国語 -』(略称『呉雅琴 1987』) / 坂元裕二『東京ラブストーリー』 / 志賀直哉『城の崎にて』 / 庄野潤三『庭の山の木』 / 曾野綾子『卵とベーコンの朝食』『断崖』 / 東京外国語大学附属日本語学校編『初級日本語』 / 外岡秀俊『北帰行』 / 太宰治『晩年』 / 永井芳男・神原周『高分子物語 材料革命の主役のすべて』 / 福永武彦『忘却の河』 / 星新一『悪魔のいる天国』『小さな社会』 / 三浦綾子『氷点』 / 三島由紀夫『金閣寺』 / 安岡章太郎『海辺の光景』 / 山内久『若者の旗』(シナリオ) / 山田信夫『華麗なる一族』 / NHK 取材班『南極取材記』 / 植村俊亮編『電子計算機による自動索引の研究(上)(下)』(略称『KWIC』)